

支部結成から教育課程研究までを振り返る

安武 一雄 ()

1. 支部結成のころ

大阪支部の結成は、1971年6月26日なにかにわ会館（現アウイーナ）に中村敏雄を迎えて、10余名の会員で行われた。その前後の支部の「あゆみ」や「研究のあゆみ」についてはKICK OFF 2号（『大阪支部15年史』）に詳しいので省略するが、支部結成をリードした出原泰明と枚方グループ（草加・村田ら）が毎年のように日教組の全国教研にレポートし、そのタイトルも「技術の系統と集団と個人」（1971 出原）「走運動で『何を』－集団の中で科学的認識を深めていく授業－」（1972 村田）「科学的認識を深める授業－ハードル走の学習－（草加）・集団マット運動の実践（出原）－」（1973）など、まさに当時の同志会の研究課題を正面に据えたものであった。

その中で出原は「グループ学習の再検討」ということで実践の中から「集団の質」と「技術学習の系統」の問題点を浮き彫りにし、その解決のためには「①既存の運動文化、技術系統に対する批判」「②ルールそのものの検討」「③既存の運動文化の歴史的性格の学習とその批判」が必要だと述べている。また村田らは「小学校においては、さしあたり、子どもたちにとって身近なもので、測定、数値化、グラフ化のしやすい運動の技術に関する科学を教え」るが、将来的には「社会科学的認識を育てていくような教材が必要になるだろう」と既に「教科内容研究」の必要性を見通していたのである。

2. 1974年～1978年

この時期は、先の『大阪支部15年史』の

当時研究局長の内田の「15年の研究の歩み」によると「支部充実期」「支部発展期」としてまとめられた時期である。それまでは、出原の勤務校である天王寺商業に事務局を置き、出原の先進的な実践と枚方グループによる「科学的認識」を追求した実践を土台に、「組織確立」に力が入れられた時期であった。

1973年度から毎月ではないが「大阪・同志会ニュース」が発行され、毎号のように新入会員が紹介されている。4年度からは「一泊合宿研」が始まっている。ただ、その1回目は「陸上運動」2回目は「器械運動」というように、支部として明確な「研究課題」が決まっていたわけではなかったようで、その都度必要と思われるものが取り上げられていたようだ。それが少し変化し出すのは77年くらいからのようで、支部体制も整い会員数も60～80名時代に入ってくる中で支部組織の量的増大が研究面での質的变化につながり始めたようである。この年は4月5月6月と「学習集団」を土台におきながら、4月は進藤を呼び『器械運動の指導と学習集団の形成』を学び5月6月と田原の鉄棒実践を研究部がビデオ撮りにいたりしながら例会に載せて検討している。これは先の内田によれば「ポドテキスト研究の原型ともいえるべき研究体制を整えた」といえるものであろう。

3. ポドテキスト研究時代（1978年度～81年度）

1978年9月の支部総会には28名の参加があり、事務局では「100名会員」「スキーフェスティバル」「水泳講習会」の上に、40名規模の「実践講座」が計画された。そしてニュ

ースには
初めて研究部によるテーマ「できない子どもを追って」が出され、研究部が支部研究を牽引していく体制が整えられた。

当時研究部長をしていた淡口はそこで「この一年間支部として、できない子の焦点をあてて、できない子を追い続けたいと考えています」とし、続けて「できない子・わからない子を本当にできる、わかるようにしているかと言えば、ノーと答えざるを得ない。その『ノー』の部分を探るのが今年の課題と言ってもいいでしょう」と、徹底した「できる・わかる」の追求の決意を述べている。そして、9月例会で「できない子とはどんな子か」を様々な角度から取り上げ、ハードル走・バスケット・マットで実技と実践報告を検討する例会を挟んで年度最後の7月例会で「うまくしてどうする」と題して「体育の学力」を問う例会を開いている。

こうした準備の後、いよいよ「ポドテキスト研究」に入っていくのである。79年夏の京都大会には大阪から70名の参加があり新入会員も一挙に13名も増えている。そんな年度当初の例会が「授業をどう組織するか」という出原の提案で始まっている。そして最初の『ポドテキスト研究』が始まった。11月「すじがきを作ろう！（案内）⇒分かったけど分からへん（報告）」1月「わかる・できる授業を目指して（案内）⇒ポドテキストが体育の実践を変える（報告）」3月「よい授業、その中身とめざすもの（案内）⇒授業まるごとの集中的・集団的研究（報告）」という流れで第一期ポドテキスト研究（淡口バスケットボール実践）が行われた。

このポドテキスト研究はこの後、第二期・第三期と続いていくのであるが支部研究面でもう一つ特筆しておくことがある。それは、同じ79年度から「ブロック研究」が本格的に始まり、ポドテキスト研究という「支部研究」との両輪による研究体制がスタートしたこと

である。奇数月がポドテキスト研究を中心とする研究部主催の「支部例会」、偶数月がブロック主催の「ブロック例会」。「支部例会」は一泊研が3回あるので延べ9日、「ブロック例会」は4ブロック×5回で20日。（81年度からは6ブロック体制）それに加えて毎週の「月曜学習会」と月一回の「基礎理論学習会」、4日間にわたる「体育実践講座」。例会をつくるための会議も含めると、膨大な時間とエネルギーが研究・学習に費やされていたことが分かる。支部会員が三桁になり、85年の全国大会を大阪が受け、全国の牽引役を担い始めた支部の姿である。

ポドテキスト研究第二期（80年度）は、上田マット実践・石谷ハードル実践・亀山ハードル実践が取り上げられ、初回を除く4回は全て一泊研で行うという力の入れようであった。上田マット実践は「マット運動の連続技の『技術指導の系統』が明らかにされてこなかったのでは」という、全国への問題提起の土台となった実践で、石谷ハードル実践は「文化研究（ハードルの歴史）が子どものハードル観を変えた」ことで後々まで語られることになるものだった。

第三期（81年度）はバレーボールとサッカーを取り上げ、「石谷ハードル実践で先鞭をつけた技術史の教材化を球技に適用していくこと」を狙ったものだった。取り組んだのは「山田サッカー実践」と「元井バレーボール実践」であるが、その最後の「例会報告」の中で研究部長だった榊原は「ひとまず学力論・技術史・空間論などが実践的な課題として支部研究に定着した」ことを成果としながらも、「問題と言え、求める事が高くなりすぎていること」を挙げている。それはその後の支部ニュース連載『集団的研究活動のすすめ』の「球技の本質を子どもたちに理解させるために、文化史としてのサッカーの歴史を授業に取り入れると、テーマばかりが先行し、…」(松井[山田]) や「わからない内容を研究すること

のつらさというものだけが残った」(元井)と
いった記述からも読み取れる。(なお、ポドテ
キスト研究前後の研究情勢やポドテキストの
意義については KICK OFF 創刊号、内田の巻
頭論文に詳しい)

4. 85 年大阪大会前後

82 年度からは支部体制を一新する中で「85
大阪大会」に向けての「支部総合 3 ヶ年計画」
がスタートしている。その中で研究体制も大
きく変わり、これまでのブロック研究と新し
くプロジェクトが作られ、ブロックでは主に
「授業研究」・プロジェクトは主に「教材研究」
という両輪で行われることとなった。

支部ニュース 89 号で支部長の淡口は、「143
名の会員のみなさん」という呼びかけから始
まる「巻頭言」で「総合 3 ヶ年計画の第一歩」
として第一に「ブロックの自立化」第二に「プ
ロジェクト研究の自立化」を挙げ、「300 名支
部会員」と大阪大会「二千名の参加者」での
成功を訴えている。

プロジェクト研究をスタートさせたのは、
ポドテキスト研究の中から教材を文化的観点
からも追及する必要があるからである。た
だ、10 用意されたプロジェクトのうち計画的
に動き出したのは水泳・障害児・舞踊の 3 つ
であった。しかしそれまでの支部研究例会を
なくすことで、支部の中心メンバーはフット
ワークが軽くなり、その分ブロック・プロジ
ェクトだけでなく全国大会に向けての様々な
取り組みがなされるようになった。ブロック
では、ポドテキスト研究の成果を受けて「セ
ット例会」と言って授業案づくりと授業実践
が 2~3 回の例会がセットで持たれるよう
になった。また、それまで行っていた支部教育
講座はプロジェクトがメインになって開催さ
れるようになった。

研究面で大きかったのは、第 1 回 (83 年 :
淡輪) 第 2 回 (84 年 : 能勢) の『支部大会』
を開催したことであろう。ブロック研究やプ

ロジェクト研究等の成果を、広く会外にも開
かれた場で発表・検討される場ができたのだ
から。そして「支部大会」を開催するという
ことは、会場校の手配や準備物、宿泊関係と
いったハード面から、分科会の設定・提案者・
提案集づくり・記念講演等々研究面までが必
要となり、まさに 85 大阪大会開催のための
ノウハウを自前でつけていくことになったの
である。

もう一つ特筆されることは、85 大阪大会に
向けての『推進講座』が持たれたことである。
当時、全国の同志会も 1100 名を超え『たの
スポ』も創刊され勢いがあったが、それでも
全国大会を開催すると反動で 1~2 年停滞す
る支部が多かった。そうならず「全国大会開
催」をさらなるエネルギーにするために大阪
支部では、これまでの最大規模の大会を目指
しながらもスタート時から「ポスト 85 大会」
を考えた取り組みがされた。その象徴が『大
阪大会推進講座』である。支部独自のものだ
けで 15 講座が大会までの一年半の間に開催
された。そこでは、同志会全国委員の主要メ
ンバーはもちろん、在阪教育サークルの中心
メンバーや研究者や活動家等、多方面から多
角的な視野でまさに「5 年先、10 年先のため
の土壌づくり」となる内容であった。(その後
「推進講座」は他の全国大会でも引き継がれ
ることが多くなった) そして、最後の推進講
座が終わったのが 85 年 6 月であったが、そ
の中の 6 講演を収めた『主体者形成への道』
を大会初日の 8 月 8 日付で自費出版している。
さらには、大会中の 16 の講座・講演から 7 つ
をピックアップして 86 年 5 月に『主体者形
成への道 II』として続けて出版している。

当然これらの出版は大会前から企画されて
いたことで、85 大阪大会後の新体制では編集
局の中に機関誌部が設けられ『主体者形成へ
の道 II』の後には、機関誌『KICK OFF』の創
刊へとつながっていったのである。

5. 「ポドテキスト研究」再考（1985 年度～86 年度）

822 名の参加（内 269 名が大阪）という史上最大規模の 85 大阪大会を終え、その総括会議も終えて新年度の支部総会が持たれたのが 10 月 27 日。この時には事務局だけでなく編集も研究も「局」体制となり、より充実した支部体制に一新された。研究は内田局長のもと「今、再び『よい授業』とは何かを問う」をテーマに、「ポドテキスト研究」が再び俎上に乗せられた。

だが、新生研究部はメンバーが若返った分 78 年の「ポドテキスト研究」を最初からかわったものが誰もいなく、1 月例会（一泊）「ポドテキスト研究・再考」からスタートした。2 月の第 2 回例会（一泊）では「体育の授業でつきたい学力」を中心に、草深の学力論を構造的に捉えることで「実践的課題」にまで引き寄せられるのではといった議論がなされた。それらを踏まえて 4 月の第 3 回例会（一泊）から、「授業をまるごと研究対象としていく」第四期ともいえる「ポドテキスト研究」に具体的に取り組まれる。対象となったのは「大村マット実践」で、これは第二期の「上田マット実践」で提起した「連続技の技術指導の系統」に対する「答え」を求めるものでもあった。その最初の 4 月例会で大村は「方形マット（連続技：引用者）へ子どもの認識を近づけるのではなく、子どもの認識の方に方形マットを合わせていく」とし「セットから全体への積み上げではなく、テーマを与えて最初の全体を完成する」という、のちに『イメージマット』と言われる実践イメージをすでに提案していた。

その後、6 月には秋から始まる実践の全体計画(23 時間分)と前半の 9 時間分の授業案が、「10 回以上の研究部会での検討」の上提案され、143 名参加の支部大会(枚方大会)を挟んで、実践開始直前の 9 月例会には「実践のねらい」と「全授業案」が提案されている。提

案する研究部も集団的に取り組み、検討する例会も一泊研で毎回のべ 20～30 名によって集団的に行われた。

こうした集団的な取り組みは実践が始まっても続き、支部ニュースで確認できるだけでも 5 回 5 人の方の授業参観の報告がされている。私も、年休を取って箕面の山を越えて見に行ったことを覚えている。実際に参観に行き、子どもの様子を聞き、ビデオで確認する中で、ずいぶんと大村学級の子どもの名前も覚えた。

そして 11 月の中間報告の例会では、例会までに行われた 19 時間分の授業報告と、11 時間分の授業観察・授業ビデオが報告され、それ以外に研究部からの提案もあったので、2 日かけても「論議が深まり始めた頃にタイムアップ」という例会であったが、それでも「…参加するたびに分からなかったことが“なるほど”と分かるようになり、うれしく思い、学校へ帰ってもやってみようと意欲もわきます(河野)」という参加者の感想にもみられる充実したものだった。

実践の最終報告は 2 月支部例会で行われたが、全 31 時間(内教室 12 時間)という壮大な実践を、集団で創り、集団で分析してきたので、その資料だけでも膨大で 1 泊 2 日の例会ではとても総括できないくらいで、その時に出た「課題」や全国大会で発表した時にももらった「意見」等に答えていくために、翌年度からの「器械運動プロジェクト」に引き継がれていくこととなった。

6. 「教育課程研究」（1987 年度～89 年度）

○なぜ「教育課程研究」だったのか

85 大阪全国大会から 3 年目。新自由主義教育を強力におし進めていく土台となった「臨時教育審議会(臨教審)」の最終答申(87 年)がまとめられ、それを受けた「学習指導要領の改訂」(89 年)を控える中で、「教育活動全体を視野に入れた『体育の授業』というところに

視点をおかない限り、我々の目指す『主体者』を育てることはできない」という思いで「教育課程研究」に舵を切ることになった。そのため支部は大きく研究体制を刷新し、この年より7つのプロジェクトが組織され、その集合体としての研究部を中心に、認識・発達の基礎理論を学習する学習部、そして全国情報の収集と発信を担うたのスポ情報部という3部を抱える研究局がスタートしている。年5回の支部例会は、最初と最後に研究局がその年の方向付けとまとめをし、残り3回は各プロジェクトからの提案を一泊研で検討している。これに「支部学習会」と「たのスポ学習会」「たのスポ実技例会」などを絡めながら最初の2年が進んだ。

○教育課程研究一年目

第1回目(1987.9)は「教育課程研究のねらいと方向」と題した例会が行われ、「同志会の教育課程分科会の流れ」(安武)「教育課程研究で何をするか」(中川)という2つの提案の後、7つのプロジェクトから「本年度方針」が出された。また午後からは出原から講演を受け、「教育課程は中途半端が良い」とのアドバイスや「学習指導要領大阪支部版の危険性」の指摘を受けた。

その後、水泳プロジェクト(87年11月)・球技プロジェクト(88年2月)・陸上プロジェクト(5月)とそれぞれ2本の実践報告とその分析レポートが検討されるという一泊二日の例会が続く。その年のまとめの6月例会では、『『わかる』をどうつかむか』と題して、同じタイトルの中川提案と年間の学習部のまとめとして「学童期をどうつかむか」が大村から提案されている。さらに黒野(水泳)・船富(サッカー)・河野(障害走)のグループノートが出されて、具体的検討を受けている。この例会の報告で、「わかる」に関して2つのことが取り上げられ、1つはグループノートに書かれる毎時間の「文章」では読み取れない「からだを通してわかる」や「単元全体での『わ

かる』の問題。もう1つは「できるとわかる」との絡みで「認識と知覚」の関係に注目すべきだというもので、現在のアフォーダンス論にも通じそうな内容であった。

○教育課程研究二年目

88年10月の第1回例会は、「授業づくり→教育課程づくり→学校づくり」(安武)と題した2年目の研究方向を示す提案がされ、「研究局の方向転換」という指摘(上田)もあったが、「学力と人格形成のプログラム」とも言われている「教育課程」と考えれば、必然的な研究対象の拡大とも言える。その例会では渡瀬・黒井の「学校づくり実践」が検討されている。

その後の3回は、またプロジェクトからの実践報告とその分析で例会が構成され、88年12月「踊って子どもは何が残ったか」(舞踊プロ)、89年2月「子どもが喜ぶイメージマップ」(器械プロ)、89年4月「運動会を変えて by 荒馬」(認識発達プロ)が提案・検討されている。そしてまとめの例会(89年6月)で「一年間を見通した体育実践」というテーマで、研究局から「一年間を見通した体育実践を提案する理由」(安武)と学習部から「三年生とはどういう時期か」(大村)の2本の提案があり、実際に3年生の「年間計画」が2本提案されて検討されている。

こうした二年間の成果として、教育課程を「学力と人格形成」と位置づけるときの「実践的側面」と「運動的・政策的側面」の両面からのアプローチが必要なことが明らかにされた。まず「実践的側面」では、トータルな人格形成のためには「技術性」に傾斜したのではなく、「組織性」「社会性」も包含したものでなくてはならないことを明らかにしている。また「運動的・政策的側面」では、「年間計画」や数年間の計画を見通していくには、教師集団・学校体制・設備・施設・行政・親・地域といった視点での取り組みが重要であることが確認された。

○教育課程研究三年目

いよいよ当初の目標であった「配列表試案づくり」に向かうことになるわけだが、二年間の成果をもってしても「試案として耐えられるようなものを作れる蓄積も見通しも」なかった。しかし、「誰かがどこかで一気に作ってしまわなければ」できないと考え、「研究局の役割を大幅に縮小し、実質…3人で試案づくりに集中する」方針を出した。年間3回の例会に絞り、その一回目(89年12月)に89年版新学習指導要領の分析とともに出されたのが、「ちょっと並べてみた表—私案—」である。中川は、「教材の枠を越えて子ども達に身につけさせたい内容の配列表」であり、表自体は不十分だが「技術性の部分に傾斜しがちな私達の実践をより広い視野から捉え直すものとなるだろう」と評している。(KICK OFF15号 p 9)

そして2回目(90年3月)には、「組織性や社会性を視野に入れた授業を考えると、グループ学習において他にない」と言うことで「グループ学習で教える中身はどう発展するか」というテーマで、小学校低・中・高学年、中学、高校で合計7つの実践をグループに分かれて検討し、そこでの成果をもとに「配列表」づくりに手が付けられていく。

3年間のまとめの例会は6月に行われ、「教材内容の配列表」が提案・検討された。最終的な形にしたのが3人とも小学校の教師だったので、「配列表」も小学校の低・中・高学年のもので、中学・高校までは手が回らず、教材群も、球技(手で扱うもの・足で扱うもの)・器械(マット)・陸上(障害走、リレー)・水泳といった限定された不十分なものであった。それでも、「並べてみた表」とも併せて「子どもが体育・スポーツの主体者となる授業を創る」ための「作り変えるための基」を曲がりなりにも示せたのではないかと思う。(「表」は KICK OFF17号)

7. 「授業づくり研究」(90年度～93年度)

この4年間は、先の「教育課程研究」の成果である「ちょっと並べてみた表」「教材内容配列表試案」を実践で批判的に検証していった時期である。

90年度「楠橋走り幅跳び実践(小5～6年)」。
91年度「山本サッカー実践(小5～6年)」。
92年度「田中跳び箱実践(小3)」。
93年度「澤口フラッグフットボール実践(小6)」。
以上から分かるように、年間1本の研究部実践を行いながら「うまくなる」という技術面だけでない「主体者となる授業づくり」のために何が必要かをじっくりと追及する研究スタイルがとられた。ここでは、当初「教育課程研究」で得た視点である「技術性・組織性・社会性」における「教える中身」を明らかにしようと取り組まれたが、それぞれの実践で求められてきた特徴的なこと、例えば「教える中身と学習スタイル」から「戦略・戦術」「技術の分析・総合」といった「教科内容」への絞り込みへの壁を感じるようになり、当時の会全体の課題でもあった「教科内容研究」へと舵が切られ始めていくのである。